# 附属図書館の直面する諸課題について

青　山　　弘

今日、大学はその生き残りをかけて大学改革に取組み、教育研究の活性化や国際化・生涯学習社会への対応に努めている。

このような状況の中で、上記の諸課題についての直接的な取組みと平行して、大学が提供する教育研究条件としての基盤整備の差異化がとりわけ重要となってきている。附属図書館の整備は、基盤整備差異化の最重点事項の一つと思われる。

以下では、本学の教育研究条件の整備としての附属図書館整備の諸課題について説明し、全学のご理解、ご支援を賜わる一助になればと思う次第である。

附属図書館の整備としては、大きく教育研究資料の整備、教育研究等への情報提供、そして施設施備の整備の３点が考えられる。

教育研究資料の整備という点では、本学の誇る、重要文化財を含む古文書類や旧五高蔵書を有するが、最先端の学術研究や基礎的な教育のための資料については、どのような配置や利用形態をとれば、限られた予算の範囲内で、大学全体としての教育研究資料を一層充実させられるか、まだ改善の余地があるように思われる。

幸い全学のご理解を得て、昨年度から研究用資料購入費が認められたが、このような大型の共同利用資料の収集の拡大とともに、既存資料の共同利用体制の強化も必要となるであろう。

また国際化対応として、留学生や外国人研究者のための資料面の整備が求められよう。

次に教育研究資料の提供についてであるが、学内ＬＡＮが整備された現在、ＣＤ－ＲＯＭ等の形態によって提供している電子化情報のネットワーク化が最も優先されなければならないであろう。例えば、現在医学分館、薬学部分館においてスタンドアロンでサービスしているＭＥＤＬＩＮＥ（生命科学分野の索引・抄録情報データベース）の利用は活発であるが、これをネットワークから利用したいという要望はきわめて強い。

電子化情報の提供の点では、既に学内ＬＡＮによってサービスしている蔵書のオンライン目録情報検索システム（ＯＰＡＣ＝オーパック）については、電算化以後のデータしか入力されていないため、電算化以前のデータの遡及入力を行い、情報環境を整備することも必要であろう。

また、大学の情報発信という観点からは、このＯＰＡＣや、総合情報処理センターの協力を得て、平成元年度から学内に公開している「熊本大学研究者情報データベース検索システム（ＫＵＲＥＳ）」とともに、前述の阿蘇家文書や細川家北岡文庫等の古文書を、原文献保存と利用とを共存させるため、電子化し、データベースの形で広くインターネットに公開していくことも必要であろう。

このように提供情報の電子化が推進されれば、従来、図書館に足を運ばなければならなかった情報の検索や、さらには文献の入手まで、コンピュータネットワークを介して研究室で居ながらにして可能となり、研究者の情報環境は格段に改善されるであろう。

さらに、情報電子化の推進だけでなく、文献情報の提供面で問題があるならば、その改善を図ることも必要であろう。

最後に施設施備の整備についてであるが、附属図書館中央館の建物は昭和４８年竣工で、建築以来、２２年が経過し、蔵書収容能力は既に限界を越えたため、増築を概算要求中である。増築部分については、単に収容能力増強だけでなく、電子時代にふさわしい機能をふんだんに盛り込んだ、斬新な図書館にできればと願っている。医学部分館は、５月１日から２４時間開館を開始したが、この増築部分も２４時間開館可能な建物とし、併せて研究支援体制の飛躍を目指すとともに、大学の地域開放をさらに推進する一大拠点ともなればと思う。

以上、この４月１日着任してから現段階で把握できる範囲内での取りまとめに過ぎないが、学術審議会から『大学図書館機能の強化・高度化の推進について』報告がなされている今日、さまざまな課題について、図書館委員会の先生方を始め、全学の方々とご相談しながら着実に前進できれば幸いである。

（あおやま　ひろし　事務部長）